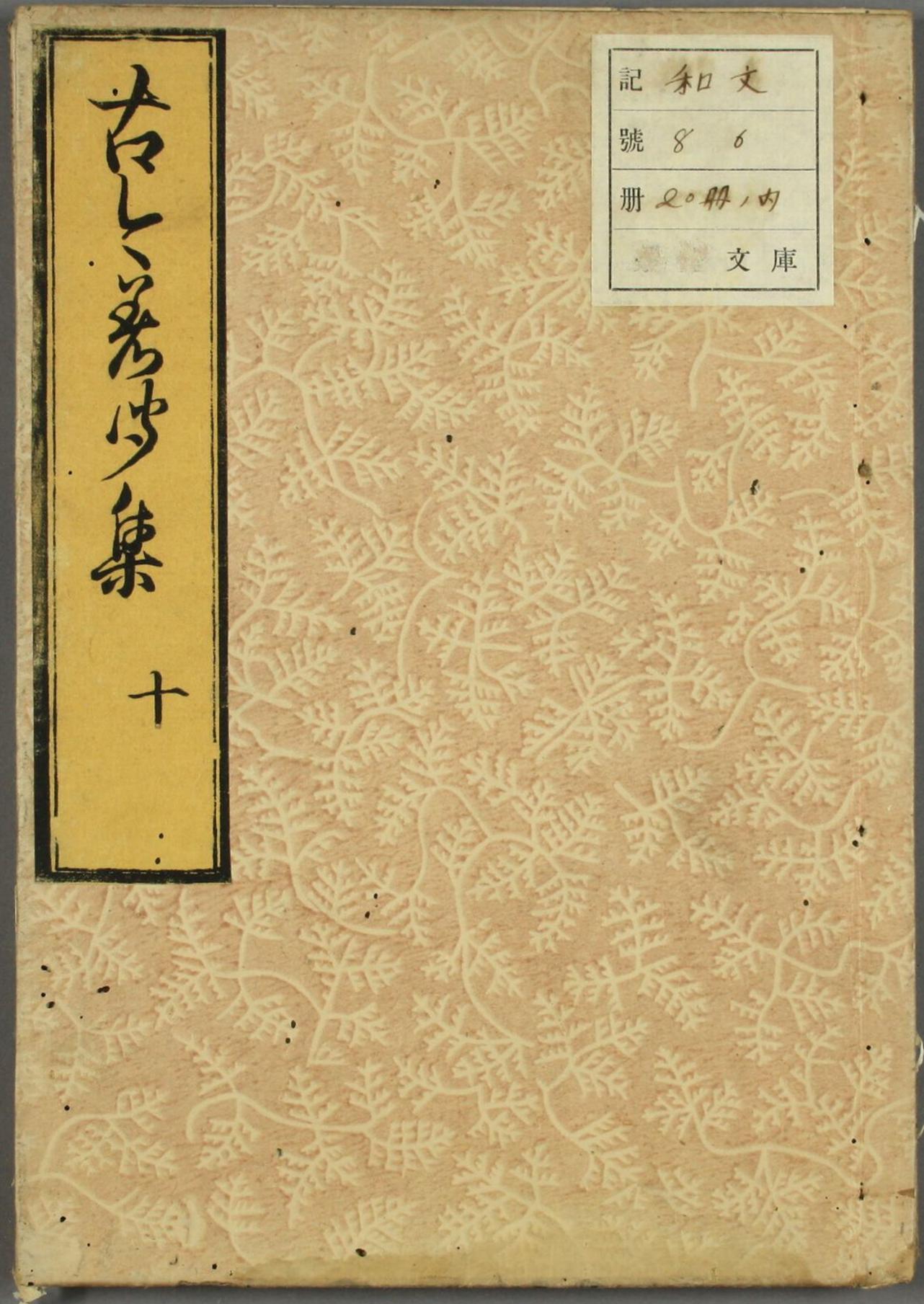




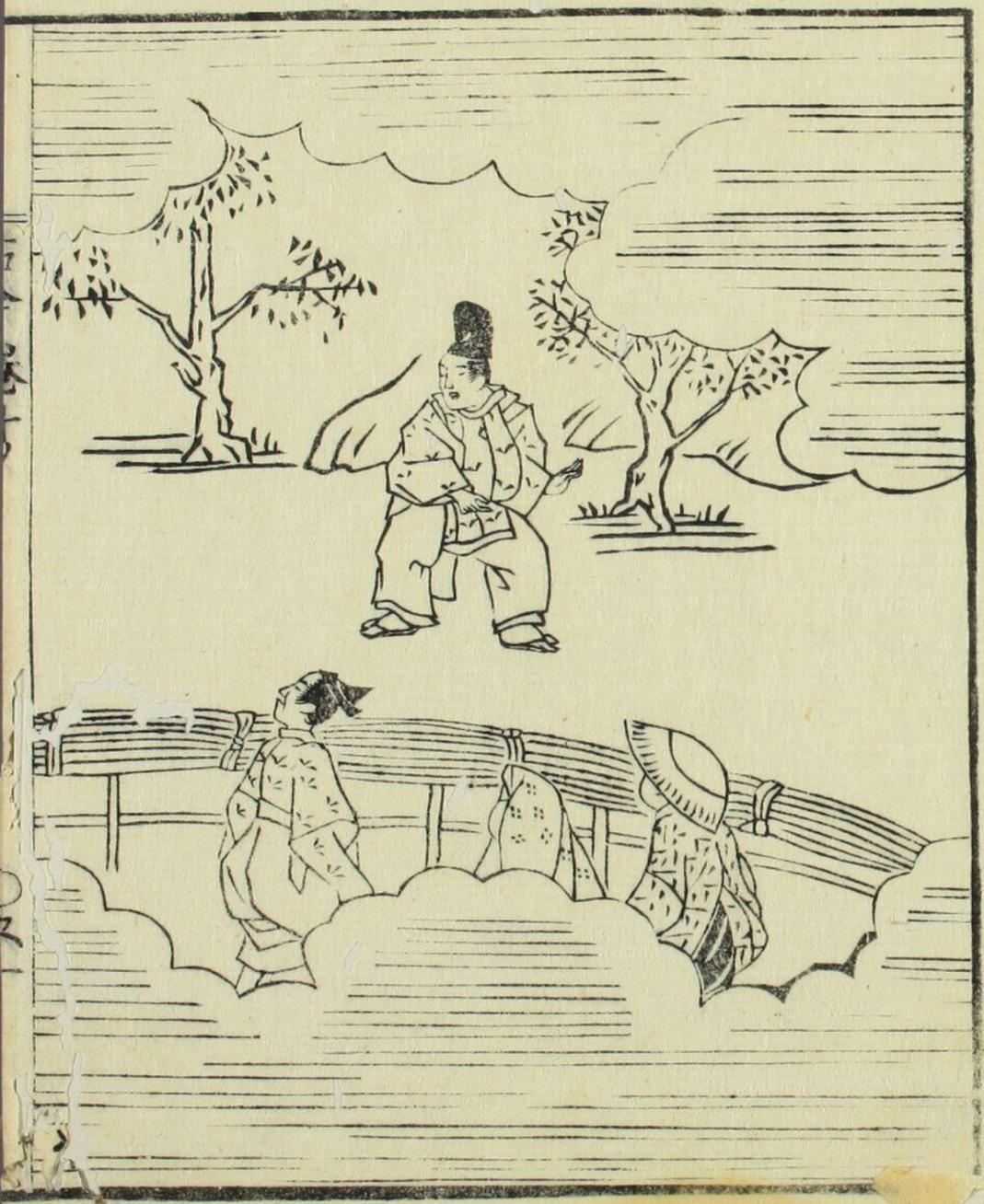
古く考史集  
十

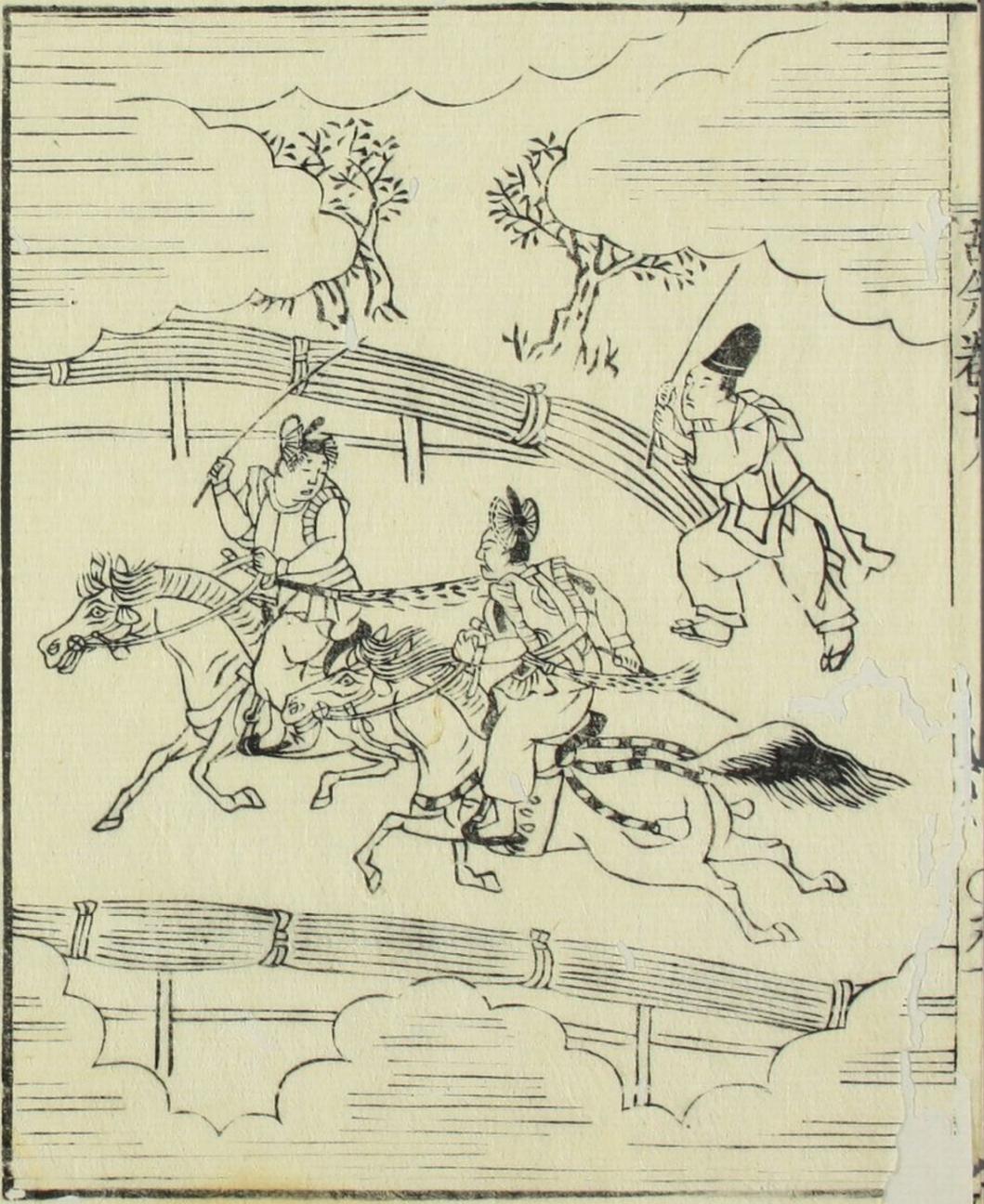
記 和文
號 8 6
冊 20冊, 内
文庫





られたり一巻たり曹尾張と前右に曹日取の  
 かう海つりをもるが曹尾張と前右に曹日取の  
 かつる半ハ船りりをり言わがうもつぬ小敷の勝  
 あり為時勢のむじろひくよけていひけりあま  
 けぞといひたりきりくまのこ系と感して勝  
 けしをりこなんいまご競るにまけけりさるる  
 あくわくのいひをいひと自あつひひやうあま  
 寛治八年八月廿七日二条大極よそくわらび  
 多味子成りて輪江をて競る六巻わりきり  
 後上人ぞつり海つりをもる舟の陣のまへりぬ





中門よじりて馳<sup>か</sup>る主上<sup>みかど</sup>の轂<sup>こ</sup>とを<sup>を</sup>送<sup>お</sup>ひ<sup>か</sup>る  
 たるふれど<sup>と</sup>おきま<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>じ<sup>じ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>ろ<sup>ろ</sup>や  
 い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>揚<sup>やう</sup>祿<sup>ろく</sup>の<sup>の</sup>出<sup>で</sup>付<sup>つ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>糸<sup>いと</sup>ま<sup>ま</sup>え<sup>え</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>  
 わ<sup>わ</sup>が<sup>が</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>中<sup>ちゆう</sup>門<sup>もん</sup>の<sup>の</sup>席<sup>せき</sup>に<sup>に</sup>中<sup>ちゆう</sup>門<sup>もん</sup>の<sup>の</sup>瓜<sup>うり</sup>を<sup>を</sup>  
 付<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>車<sup>くるま</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>そ<sup>そ</sup>と<sup>と</sup>び<sup>び</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>是<sup>こゝ</sup>れ<sup>の</sup>後<sup>の</sup>  
 こ<sup>こ</sup>ひ<sup>ひ</sup>か<sup>か</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>作<sup>つく</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>  
 天<sup>てん</sup>保<sup>ほ</sup>元<sup>げん</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じゅう</sup>月<sup>げつ</sup>廿<sup>にじゅう</sup>日<sup>にち</sup>多<sup>た</sup>御<sup>ご</sup>所<sup>しょ</sup>宣<sup>のたま</sup>治<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>例<sup>れい</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ  
 て<sup>て</sup>高<sup>たか</sup>の<sup>の</sup>船<sup>ふね</sup>ふ<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>乃<sup>の</sup>の<sup>の</sup>程<sup>ほど</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>  
 高<sup>たか</sup>白<sup>しろ</sup>河<sup>がわ</sup>流<sup>なが</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>川<sup>がは</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>使<sup>つか</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>廿<sup>にじゅう</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>  
 中<sup>ちゆう</sup>院<sup>いん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ



形にたぬに御負とつとて一作よきなり付  
 弘まひくきり敷近ぐあらけ種ととりて引り  
 たりしをれれ敷近揚にきり為弘とてたて負  
 みりたりこれより下田派おとつしきり洗  
 には威まてぬ人たにめされたれ為弘あせ成  
 とい先よきり敷近小方人儀以せたりをれば院  
 たり小方人せめされきき天来名ありきり  
 方たまりのおちくち焼ゆつお天長の中おし  
 しきりそ女帝花の蹴ひとてな海ぶあよ打け  
 られり敷近ら種と鞭よりけく肩おへかけ

たりあつてし物たのみをりおめて膝おひや他  
 やいひろきれを種あきりききんきりやれ  
 ぞこれぬおとしひをれりきりやいひき家あき  
 身まともゆたききり  
 後ろ相治れ出付の競るに地のが長恭お次  
 萬年 府生下野 敷近つらう海つりきりねお  
 へゆるの鞭を打たりきりきり場り中へ立り  
 きりきりに敷近揚よきり御負善悪はらへ  
 さいまき程つく敷近せめされるに保延の敷  
 け事とひひ知し種を鞭のふよりけくたてり

西条抄  
ゆたふ白ひく膝よもや無ふせりひりせり  
糸と河くぬく西条もお遠しとせりこやか  
やうれまゝの人ふらうてりあひま

西条元年よみ月會ゆく侍きりしや奉る系  
下坐教系 教則子わをせしきりきるひと系は海  
まら子教系をひとみりきれば業のてく教系退  
てきりくしてゐ場末あくとけりふきんきりい海  
まればあ人あされよきり三系ハりきりり此の百次和  
ふいせり教系教威れわありふ次日百次和りし  
たにじはた文た柳云海季にきりあくと作下れ

きり三系ひる成はく此の仲のふ主典代廳岩お  
どがしきる仲よえ成うや教系三系よおしとるま  
此あめされ侍りくと系お侍りるんりのいり侍の  
目あうわあごきりいひきりきりい長きりい  
中松の内長志天おめくかりしきり侍佐伯お芳子  
三度よて侍り侍が元年三月よ月内長志天  
侍侍侍侍侍よまされよきり侍侍の兼ふをえ  
かりきり侍侍りいひれりきりい西方を侍侍  
と侍侍りきり侍侍り今お西方を定てしを侍侍系  
侍侍侍りんと近席の今人お侍侍侍り侍り



らさきるんをれ事なりきねどいそきうりきるん  
教をそとれくびのう斗候きて事のうりきれがき  
事いんく心がゆされんはゆさうゆつりふされど  
行あくふきり道る用意志心なごのみがくん  
きり歎な感わりん四さう正きりてほづまは作らき  
くれどゆりきる河のりありきるゆされさうゆさ  
ゆさうり家とて夜中のふひきるに寂あ寂一紙も  
りせされが肩よりけくおきりゆかぞんさうり  
武あ志必任人つごもれ平冬強ああハきあれさ家馬飼  
ゆりきり平あれゆあかりきんは強念家大おめ

あへて系耐よれきあきりそ耐陸奥よりたはは  
てまけと恐ある強きりこりきる強ゆゆをれら物強  
ありのえささ家たに西くおのせうききれ一人を  
さあゆりのゆりきり幕た下おひさうられさうふ  
てとほさたのりゆのたうそ屋あん事口揚さうい  
いふとととと系耐よひひありせゆひえれが東八ヶ西  
ふ今ハゆあさ者らと但あ人終あぞゆさやを  
きバさうバめせとて別百ゆられぬ白あゆさ平に昔  
の務あとぞあさりきる幕下ゆゆ思るありはり  
てんやくのゆらせられは強あうあさうりてるぬ

うかひ人よのほつと雲よそとをわたりけり  
そ人よあつとぐらぬもやうとさしやきれば幕下入  
真きれきりさうぶはうらまらきとて別る成り  
如されぬ被よたふれたうらてあつり成るひく  
らひまのりきり神楽水干れ袖くりに移れそふ  
まうくとさうそあがりしげきく海よありまら  
糸の死まがゆもあつとそとさうらうのそおひまら  
き海もや雲とぞりしをぬりきるを漕とらげ  
てうし繩とせしりきる波おも半大せひも糸  
うとさうらうし繩よとさうらてぬりよりて糸

てきりをぐてうらりゆがりてあつり波あり一糸を  
てお止めてのちうくとあつとせく幕下のあよ  
むけくたてうらきりる若目波おらうらうら  
のあつとさうくのせ今んあうあつとあつと  
のあつとさうのあつとねらうらうらあつとあつと  
まれく麻別あふあつとれよりな神楽がうらあつと  
ハあつとさうよれさうく何ありまらんあつとさう  
一うらけさうさうらあつとあつとあつとあつと  
あつとさうらあつとあつとあつとあつとあつと  
ゆをさうらあつとあつとあつとあつとあつと

もやくぞみきり幕下富士川あひぎとの船り  
ゆききり時八時家ハる七八は結垂て由纏むす  
ひく人もつけどうら放しゆきねん陸家ぐその  
鹿ふもぐひてりきりえお備あてそのつら  
およひ百ふ志くひくぞきりねん家うねん信人  
つらそのおし陸家いふひく入海して死なれ  
ハ知りのおし口おきり

一係二位のふれりきりきりきりきり  
泰教久とてしきりきりきりきり  
こいおきりきりきりきりきり

そつんくわろくはくうまうき物き教教ハのき  
こいおきりきりきりきりきり  
ゆのきりきりきりきりきり  
人々目みねらろくきり

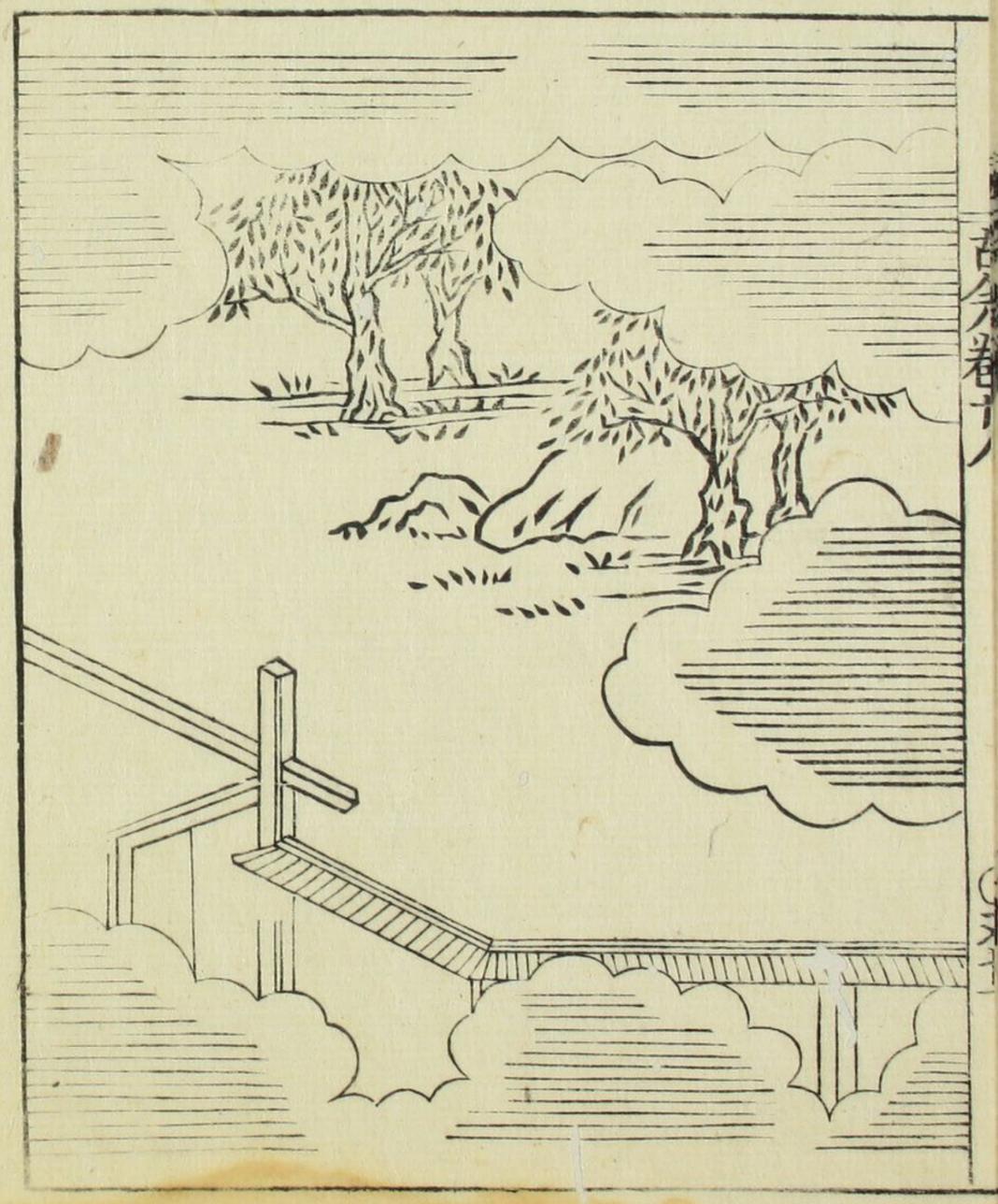
建仁三年十二月廿日（建仁三年十二月廿日）  
あまきりきりきりきりきり  
大お（たのお）下教（のあか）教文（のあか）つらりせら（のあ）り久信（のあ）を  
上（のあ）の教文（のあ）ハ不徳（のあ）の考（のあ）きりきりきり  
ひて解（のあ）しりきりきりきりきり  
あつはくおきりきりきりきり





海を渡るに由りて文がさるのみづくらぬおては海  
 つらまをるに由りて文がさるのみづくらぬおては海  
 とおしをいりて平路とうらしてせりきをを豊と持あが  
 らるるおしをいりて平路とうらしてせりきをを豊と持あが  
 中判發親持る傷事成守護してぬせるがそをぬきたり  
 まゝのぬき文がさるればぬきをぬき付て様あふと  
 てとてあてせりきををぬき付て様あふと  
 りぬきをぬき文がさるればぬきをぬき付て様あふと  
 戸路んとのぬき文がさるればぬきをぬき付て様あふと  
 が戸路んとのぬき文がさるればぬきをぬき付て様あふと





ながげ正そよりきり西文響まげくわげて集りて  
 里念人ま入目付付て縁二樹なま自りきりて  
 歎感わりきるとそくわうれ時おまごいそいそ  
 八は神の祀一おれりるん地外く向の樹わりて  
 侍あるそ一ありとそ坊のたれ云もなま集りて  
 侍をる時建暦の由候り香小一六といさるふのりて  
 侍手せられつるをるん二条室明よて侍の由候り  
 おれ侍風の吹わげくまこりきるにたろろそ  
 おのあよりりくくまこり候りまろろくま  
 る候りてくまこりまろろ候りまろろ候り

り靴とわの足つねどまて靴しんぞうをりめく他とを  
 お母とのらさけもあはくして二条馬うまのりも機女  
 此おめくともあつ靴をきりたる者目法をどうり  
 たりを機女ゆりのまきる人よそのもだ機女とまびく  
 せりきりまびくは機女よんをちんしるうりあつを  
 考一多くゆりまびくは機女よんをちんしるうりあつを  
 交まじりてゆめよ同じさふまきく麻あしはけし靴せきり後  
 小麻こあしはけし入きればるもつごそへよきりあつ川  
 うち川とてんごりまびか上下おろろさおびくわ  
 たりきり靴よまびくしるそ物具ものぐあつ機女うまはれうさふ

入りきりも後とていあくとまいたらりきりあつは  
 てのらぬわいあつたりあつまねの目法をこのりきり  
 ちりけりまびくあつてあつては機女あつてきり  
 きりまびくはあつて二びきりあつてきりまびく  
 機女よんをちんしるうりきり

建保六年新日吉の小五月まふ新元あたらはあつて  
 春も同様はあつて海川とまびか機女あつて機女よ  
 うる機女あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 がは機女あつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 くれは機女あつてあつてあつてあつてあつてあつて

て生いづきせ給てトク世冠のひごまへえまふくせ給て  
ぬとまふりせればおのまうう鳥帽子そりしとていひ  
半りきれて別下人が鳥帽子と川いませわけく系  
ころきるいみじうんころ

相撲活方 申すよ

お撲は元よりは或の元或の元皆活れ給ふとい  
しごも入ぬぬれお唐よりありま昔ハ格あやうくとも  
まは活れ給ふよ活れれりのとるめされ、まの  
安えりりよま活くとま活のこま活しとていへ

延宝六年 閏七月六日中の事なりま、童お撲乃  
事なまよりかまともく舞と奏とたハ藤合在  
おも撲次ハ新傳の調子と奏とまの世  
傳ハお慶下舞ハ或ハ新王傳ハひる舞終  
て新伝実教と成儀一まり次ハ舞王調子  
奏とと或ハ新王小傳以わりまを名  
相撲之平儀同之國のいの中ハまうりまり因弘ハ  
まの舞儀の神のい方ハまうりまり神れ作ま  
うりて神れまうりまの舞をまうりまうりまの  
まのハ神弘が首を切つてん字平負ハ又字平が

首領らうんぞいりきり成る事わがらよ因縁せ  
しして別さまの財弘成る事おぼく地よおぼけ  
せうりせれん財弘志うーらうらうらうらうら  
まやちやーまんは泣きふいふ事とておぼく事平  
小録を結らせるとおん財弘志とていつて財  
の害の本成おてざり

ある財物志部備お守ゆくまきると財弘  
が象ふりてんきれとていつて神牛と川物おきり  
お光あやーやんきれが財弘あてとてまきりいつ  
此の年おお撲のまきと勝恩と重成と合う

くらに重成が鹿と本よまきとせきり成事せみく  
只と小ち事おぼくおぼくひまに果して重成本  
とせうと勝恩おわりのまきと勝恩まうびおきりお  
勝恩右府とてまきと勝恩まきり勝恩とて人  
成とてせられまきり勝恩まきり勝恩も打た  
されりまきり

今年たのお撲多く負る事成右府おぼくまきり  
うとまきりたの方より勝の方の勝恩負つては  
と勝成せまきりおぼくまきり勝恩まきりおぼく  
まきり勝恩と火成まきりまきりまきり勝恩のま

勝恩のま

勝恩のま

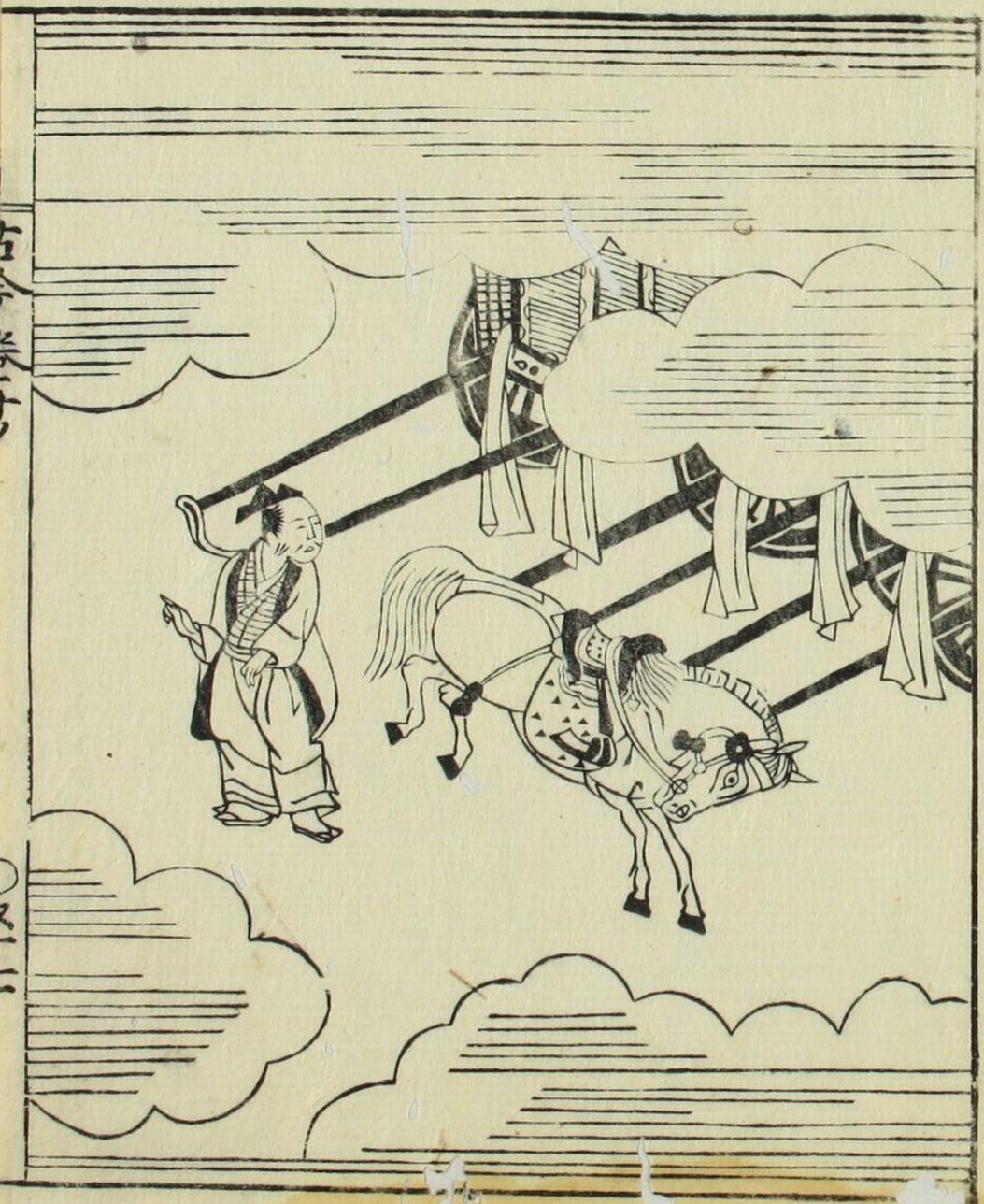
後負とせしむるに保壽寺に於て并其の事とて  
斗のお積をよと申して後負せしむるに保壽寺  
事と世の人推するにの徳あると申すに後一條  
院の西側の事とてお積の事より久光と申すお積  
元と申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
より申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
にとて申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
に今より及ハぬ所とて申すに久光と申すお積と申す  
に近所より申すに久光と申すお積と申すに  
とて申すお積と申すに久光と申すお積と申す

どの禁獄とて申すに久光と申すお積と申す  
禁獄八令と申すに久光と申すお積と申す  
久光と申すお積と申す

延徳二年八月三日御所の前より御所へ  
湯後申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
延徳二年八月三日御所の前より御所へ  
とて申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
より申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
に久光と申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
に久光と申すお積と申すに久光と申すお積と申す  
に久光と申すお積と申すに久光と申すお積と申す



たりしり女もきり氏もさしとるるらんてててて  
 打つていひたせたりきれづるよりありて女れ桶を  
 ころめひおれりもくもはなてありてりきりお女ら  
 知くまきしそりてなみれてはなめりもおりき  
 さいいりわのわくまきくひおをせしこめりり  
 ころり時桶をきりて氏もがもは服よんて  
 てたり氏も身おりのておおれよやくもあれど  
 ころめひおれりおいひのきり川ぬんとはれど  
 いりていりていりていりていりていりていりて  
 ば力ぬりていりていりていりていりていりていりて





一、女中入ぬあすをて後日成るる一、て打笑て  
 一、海の中よりぬ入る一、そくはまの海ぞせいのり  
 一、さ半くうらぬさしてあえごくそんきり我の遊  
 一、あまののくお積のまはといふ半ぬそかつたの  
 一、とぬくうらぬ海の中よ入る一、まくとかてあま  
 一、てさうあつてあまの半ぬそゆられま城ひび  
 一、くれぐせよまぐれつんたかもゆらんは方とい  
 一、くのひち一、ぬくあまをたのちのちまよま  
 一、こゝろあつてく<sup>見</sup>まをまじらもさう海に  
 一、はさのびるを海の中よ入る一、まふこ七日<sup>還</sup>返一

多くは頼ふらとどりうひまんとりて日殺しを  
 きりうりかじしとていへるのさゆりまいたり  
 ありがひくさゆりふきりて来よりふをたぬを  
 してうりせきりて女に引くはぬとせうりて  
 小おまじしとていへるの七日はたてえひ  
 してうりせきりて七日のひかりくして  
 廿三七日よりぞうりうりうりて七日の  
 うりうりて今ハそくのうりて  
 ハさうりせきりてとていへるの  
 めつうりて半なり件のさゆりのおゆり

中におゆりてうりてうりては村人  
 誰とてうりておゆりてうりて  
 たりておゆりてうりて  
 ぬれぬ方ゆりて及ぬはぬ人の  
 へりておゆりてうりて  
 くれがうりてうりて  
 わりて村人てうりて  
 のきんとてうりて  
 せきりてうりて  
 海とて今よりうりて

徳一は石のけしきしひきればさぞきりとりて又  
ホリこれよりのをとぎりもほつたぐくあ備はる事  
りて田やほりおろりきりさぞ大舟あつた  
そひらりきりきり件のるる舟子が水に石とて  
那よまどい物りしなん

うたの舟は春とあはれなる物よあつた事  
めうてふに船のりて或付の船よりあつた  
春うんとさう船はるる事おとれは  
てりうを船りては船はるる事おとれは  
うをさめるとりきればおとれは

のれあひまきりさうあつた事おとれは  
さう二人りあつた事おとれは  
おとれは船はるる事おとれは  
りそれより船はるる事おとれは  
おとれは船はるる事おとれは  
おとれは船はるる事おとれは  
おとれは船はるる事おとれは  
おとれは船はるる事おとれは  
おとれは船はるる事おとれは  
おとれは船はるる事おとれは

中納言お撲とあつてはむじがあつてさになつてしまふ  
をうせりくハ徳兵衛とて一あつてはむじがあつてさになつてしまふ  
ぞと作人あつてあつてり別中納言を本海のお撲好む  
いけ後へつとつがひて徳兵衛と改まじし後へつ  
これ割止まるといふべしは角つてんふと改ては永  
びり伴止まるといふべしは角つてんふと改ては永  
てかあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
されく感てあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
いりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
ざりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり

ひられりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
ふあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
よとつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
徳兵衛お撲とあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
お撲とあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
是といひて島山を町に命中ぞいあつてりてあつてりてあつてり  
もあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
中納言とあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
あつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり  
首白くあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてりてあつてり

不七おく取まゝに海舟渡りゆく座よは到りや居たり  
 々も大おねらしくそれづくともをれたかこゆりて後  
 ぞり根抽液しく採取の事れり後尸おんともか  
 定しく心祥あぞゆんざんとしてあひあひあうて  
 小座申もあびがうてあひあうひうりの路りせ  
 くれぐれまゝ忠とうくやうのうてうこゆりてはあう  
 ぞり山事いびくよあまの附まゝらして居るゆりて  
 君の次大事候もあういそくあ細とりるん  
 いひたりをれだ大お入真一様くもあまはあ居あ  
 いぞくまゝと多合うてうんざんとして東八やあ

とづりきるは自備仕つる種もあうまゝのむをたお  
 御たあうんまゝとてあひあうたぞりうこをてがあ  
 ぞりあまゝの路りせくれまゝあお 外ぞあてい  
 一ゆりゆりゆりていあ事ほ大おされんそま  
 八ああうそあひあひのうあういまゝくもああ  
 びりあわりのあああう時きああをまゝああ  
 くらりま(馬)帽あうけあうてかりあああああ  
 小座うけいああああああああああああああ  
 中ううああああああああああああああああ  
 とぞあああああああああああああああああ

島山がこゝびとつゝく打く袴のまらぐととらんや  
ちぎる成島山をたれく張ひしとむらとくをながく  
て程へたれと<sup>新</sup>今ハ事うく四張んぬさちうせや  
ゆべうんとやせう張大おひつ母らるやうのわらん御貞  
まどととの終りせとて毎ハお指せまりおまははま  
てざりあがて死入て足張あまをしをねんてあ  
てどしおめしうとこ出よせりまおの度りりり  
つ事と那くつとをいあやちておる出よせりおあ  
それより肩のあひくくけく片<sup>こ</sup>備物よぬくはあひら  
るも那よりせりあひととりのいごよまおよこそ同お

どうにきりるしと那り  
を此道にぬくの河よ金といふおおまきうまの  
れ若くはるは那の書よと自法すききりれ件のは那  
又わぬあよの然るにしてかういなる成金おれあ  
おとくしひあひまりある夜合宿あてりおゆは法那  
あふなりてまののやうおは事らととそんを海と  
たま海りせりきり成にもよハ<sup>新</sup>つうくもあてざり  
あがハキらあれうとあひくともいせくせのひおれバ  
たもまらつあてハ法那あが人のあづりして人こを何  
らあはのて成あてて海よのよんうりて神に記ん

みまにぬめりしころえんとそそぎ志あよ志ありけり  
 まれど流よわらぬやうそそぎあふりそ耐をけりぬ  
 流勝らそそぎ也流入くまづに息斗わうひさるあ吹  
 をどして一耐やまきいそわがりみきりわうりきる流  
 を流あふの武士たあふて系上まそそいびうの川より目  
 にく常一きりるあ湖より入くひ中きるを伴り  
 竹の俣きりるこの流にきあふおよおらうそそぎ  
 まひさる人わあそあけり引くあをねあおもせざ  
 引くあうりてそそぎるんげ推あひぬそそぎ  
 せうらそそぎる事とあそそぎたうそわいづあをねきり

まかにあがく一あふのう繩のよれとむせくあふ  
 たりあふられくひつそそぎあふとあふりあきり  
 人目あがらうひさるあふらあそそぎあふらぬ  
 くくそそぎびそそぎあふらそそぎあふらそそぎあふ  
 らえあそそぎ人あふらあふらあふらあふらあふら  
 そそぎあふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら  
 ぞ月極一きるあふらあふらあふらあふらあふらあふら  
 うそそぎあふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら  
 かくれあふらあふらあふらあふらあふらあふらあふら

古今集卷十 三十三



とあるれまあくとらあけおをふれたらあつた  
 あくととて作をすまればあつたあつたあつたあつた  
 八まのまゝそ作を揚負まればあつたあつたあつた  
 所一はた一とあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 神祇川らあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 うとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 をあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 きのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 ぞり形神けいしん後群ごぐん勇力ゆうりき鞍人あんと鬼おに五ご北きたささちち紙しああはは





て力士の忽り事即ち是より弘光又秋討よとらぬ  
 夕陽九章と云ふも先としく徳人自派替り一  
 してさあめたの事程よ仔細もみりて弘光が  
 死すまふあつてくつるに侍中もまらぬわ  
 取も那弘光死す立派りて是のわやまら  
 ぶ下とえあめたる仔細又及れぬまらぬ  
 の仔細を只書きていふは又弘光が  
 死すまふあつてくつるに侍中もまらぬ  
 弘光のけさあつてくつるに侍中もまらぬ  
 鳥帽子の落る様ぞ入る所のあふはぬ

古くは法に守りて人の善悪を以て治めんとす斗り  
 治まらざるは治まらざるを治まらざるを治まらざる一切は法  
 不徳の者なりとて法を以て治めんとす治まらざるを治まらざる  
 人を以て治めんとす人の善悪を以て治めんとす人の善悪を以て  
 治まらざるは治まらざるを治まらざるを治まらざる一切は法  
 不徳の者なりとて法を以て治めんとす治まらざるを治まらざる  
 人を以て治めんとす人の善悪を以て治めんとす人の善悪を以て  
 治まらざるは治まらざるを治まらざるを治まらざる一切は法  
 不徳の者なりとて法を以て治めんとす治まらざるを治まらざる  
 人を以て治めんとす人の善悪を以て治めんとす人の善悪を以て



古今著聞集卷之十終

